

序文

薬物治療に関わる薬剤師には、薬物の薬理作用と作用機序、薬物動態、安全性などの薬理学的知識はもとより、疾患の病態や症候、臨床検査・診断、そして非薬物治療も含む治療全般についての知識が求められるようになった。これらを修得することにより、調剤、服薬指導、処方設計の提案などの薬学的管理の基盤を築き、医薬品を安全かつ有効に使用することが可能になる。

本書は、臨床薬学テキストシリーズの第5巻として、第4巻『[薬理・病態・薬物治療] 薬物治療総論／症候・臨床検査／個別化医療』に続き、[薬理・病態・薬物治療]の各論を構成する一冊であり、1) 神経・筋疾患、2) 精神疾患、および3) 麻酔・鎮痛の三つの領域を対象とする。薬学教育モデル・コアカリキュラム(平成25年度改訂版)との関係では、「E2 薬理・病態・薬物治療」のうち、「(1) 神経系の疾患と薬」に該当し、この項目には「①自律神経系に作用する薬」、「②体性神経系に作用する薬・筋の疾患の薬、病態、治療」、「③中枢神経系の疾患の薬、病態、治療」、および「④化学構造と薬効」が含まれている。

神経・筋疾患は、脳神経内科のほか一般内科、脳神経外科等でも取り扱われ、神経線維の脱髄、神経細胞の脱落といった神経系の器質的障害を伴うものが多く、それに応じた神経症候を生じるという特徴がある。精神疾患は、精神科、心療内科等で取り扱われ、身体的疾患とは極めて異なる性質をもっており、その背景には中枢神経系の分子メカニズムや病態が存在するものの、精神状態の平均的価値や基準からの「偏り」というヒトに固有の問題が中心になる。さらに、麻酔・鎮痛は、手術侵襲や手術ストレスに関わる急性期の反応と、がん疼痛のような慢性反応のコントロールに重要な役割を果たす。これらの疾患の薬物治療を系統的に学習するうえで、神経系の構造と機能を理解し、主な神経・筋・精神疾患を理解しておくことは、非常に大切である。

脳科学、神経科学領域の研究の進歩に伴い、これらの疾患の薬物治療にも大きな変革がもたらされている。さらに、この領域にはアルツハイマー病やパーキンソン病などの加齢性疾患が含まれており、これらの疾患の克服が、超高齢社会を迎えた我が国の医療における重要な課題となっている。薬学生諸君が本書で学ぶことにより、薬剤師、薬学者として必要な神経系の薬物治療に関する知識・技能・態度を身につけていただきたい。

本書は、臨床的な記述を充実させるために、薬学者のみならず、第一線で活躍中の医学側執筆者との共同作業によって生み出されたものである。難解と思われる医学用語や関連する知識などはサイドノートでご説明いただき、最新のガイドラインの内容や近年導入された新薬、そして多数の構造式も盛り込んでいただいた。編集に際しては、国際医療福祉大学の辻 稔先生のご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2019年7月

赤池昭紀